

JICA 緒方研究所・外部有識者評価委員会（第1回） 概要

1. 日時：2025 年 7 月 28 日（月）9:58～12:12
2. 場所：JICA 緒方研究所 4 階 400 号会議室及びオンライン接続
3. 出席者
【委員】
公益財団法人地球環境戦略研究機関 栗生木 千佳 上席研究員
慶応義塾大学総合政策学部 神保 謙 教授（オンライン参加）
政策研究大学院大学 園部 哲史 教授
東京大学未来ビジョン研究センター 高村 ゆかり 教授
【JICA 緒方研究所関係者】
研究所長 峯 陽一、副所長 亀井 温子、各領域長 他

4. 議事概要

2011 年より第三者評価委員会として開催してきたが、毎年度の活動の評価に加えて、多様な分野の有識者と今後の研究の方向性について意見交換することを目的として、今年度より外部有識者委員会として2部構成で開催することとした。

第1部の緒方研究所の2024年度の活動報告では、研究発刊実績（73件）やセミナー等を通じたアウトリーチに対する高い評価を得た一方、政策志向型の発信、人間の安全保障の概念の浸透や、アウトリーチの方策についての改善点が示唆された。

第2部の今後の研究の方向性にかかる意見交換は自由な議論を目的に、非公開として実施した。

●開会挨拶

第三者評価委員会から改組された本委員会は、従来の評価の観点に加え、社会情勢が激変する中、当研究所の長期の方向性について大所高所から意見をいただき、将来構想について意見交換することを目的としている。なお、冒頭、研究所の特徴として3点言及しておきたい。

1点目として、設立時の緒方貞子氏の強い意向を反映して、当研究所は研究組織として学術成果を確実に出していくこと及び英語での発信を志向している。

2点目として、緒方研究所はJICAに所属する機関であり、開発の実務機関としてのニーズをしっかりと意識しながら、実務に役立つ研究を重視している。

3点目として、開発協力大綱の基本方針である人間の安全保障を、ODAの柱、国際協力の基盤として研究している。全所的に取り組んでおり、フラグシップレポートも発刊している。

以上を踏まえ、本日は忌憚のないご意見をいただきたい。

●第1部 緒方研究所の2024年度の活動報告

冒頭、2024年度活動報告の概要を研究所より説明し、その後、委員より以下のコメントを得た。

(全体)

- ・ 常勤研究員の人員体制を踏まえると、査読付きジャーナル等十分に発刊されており、一般的なイベントもよくアウトリーチできている。研究実績の積み上げも奮闘していると認識。なお、実務者の研究意欲の高まりに関連し、実務と研究所の人材交流状況について関心を持った。実務と研究所間の人材の交流は、開発分野に限らずよく見られることで、JICAの実務への貢献の観点で有用。
- ・ 人間の安全保障の理念と実践の推進を中心に、多角的な研究成果が着実に積み上げられている印象。活動に敬意を表する。人間の安全保障レポートやHS指標研究などがJICA本体の戦略等にもどう活かされたか等、連動性、連携性を高める取組ができると面白く、またこれを示すKPIを導入するといったことも考え得るのでは。また、事業部門やグローバルサウスとの連携によって共創型政策研究やEBPM推進が強化されると興味深い発展が得られると史料。
- ・ 研究所はいい活動をしているのでそれをうまく見せていくことがとても大切。例えば、活動報告9頁の表1は、発刊物の件数を示すだけでなく、どの発刊物が研究所のビジョンや3つの基本方針にどう貢献しているのかの見せ方、JICAにとっての戦略的な位置付けの説明を加えることが重要。また表中の数字に関しても、数字の意味や解釈を説明していくべき。ディシプリンによる違いもあり、ジャーナル論文の件数だけで一律に成果を測れるものではない。ポリシーノートが単なる研究の副産物ではなく、研究成果のJICA事業への反映というJICAにとって重要な意味があることがわかるようにすべき。SNSを媒体とした発信についても閲覧数等インパクトを数値化して見せる、あるいは海外の研究機関・援助機関との連携についても実際の取組がより見える形で記載したほうがよい。
- ・ JICAの活動を専門的知見で学術的に支える研究所の役割は大きい。限られた常勤研究員数で研究成果を非常に着実に積み重ねており、学会の中でも非常に高い評価を得た論文や研究成果があったことを評価する。なお、人員体制に関して、研究所の専従者と兼務者の割合を知りたい。また、研究成果へのアクセスが増えている点の評価する。他方、研究成果のインパクトの最大化が今後の課題と認識。実際のJICA事業で研究成果をより一層役立てるためにどうするのが重要。また、学会や学術界を通じたインパクト、あるいは国連機関やマルチの開発機関等への働き掛けもありえる。今後どのような取組を強化する計画なのか、またどのようなチャンネルの働きかけを強化する計画か知りたい。

(人間の安全保障)

- ・ 人間の安全保障の概念は開発分野以外では認知度が低い。様々な機関と連携

して人間の安全保障の概念とその重要性をより広く一般にアピールすべき。他機関との連携として、他大学との連携、また科研費でのコラボレーションや客員研究員との連携が考えられ、その点どうしているのか伺いたい。

- ・ 昨今の世界情勢や国内の政治状況に鑑みて、政策コミュニティである政治家や中央省庁、また国民に対する人間の安全保障の基本理念の浸透は非常に大きなポイント。政策志向型の活動の強化が重要。
- ・ 人間の安全保障の普及に貢献するためには、国際情勢を踏まえた課題の選定、研究成果をインプットするチャネルの選定に戦略的に取り組む必要あり。他方で在籍する各研究員の専門領域はすぐには変えられないので、研究課題と研究員の専門領域のマッチングにも課題が生じる可能性がある。マッチングについても工夫があれば伺いたい。

(発信)

- ・ 知識の蓄積や学術的発展とともに、ディセミネーション戦略も重要。時間をかけた丁寧な研究も大切ではあるが、Xや即応性のあるウェブ上のツールを活用して、地政学的にも重要な開発関連の重要な動きについてリアルタイムのレスポンスやタイムリーな論考・解説の発信等をステークホルダーに届けていく、またそのようなイシューについての議論の場を作る活動は大変重要。それらは論文よりも多くの人の目に触れる。特に動画コンテンツは数万人単位で視聴されることもあり有効。

《緒方研究所からの説明》

(全体)

- ・ 各委員より多面的に、激励も含めて評価していただき感謝申し上げます。
- ・ 実務と研究における人材の環流は資産であり、人の流れを意識的につくることが重要。研究所を風通しよく保ちつつ、元 JICA の研究者を含めて外部研究者と関係を構築する方策を検討していきたい。また、大学との連携について、JICA の留学生の受入れ状況等も踏まえて、戦略的に連携していきたい大学を検討している。制度に縛られず機動的に検討していきたい。事業部との連携事例も見せられるようにしていきたい。途上国のシンクタンクとの連携にも T20 で刺激を受けており、今後検討していきたい。
- ・ 研究員の約半数が JICA の総合職職員であり、残る半数が有期職制である。兼務発令は人事異動後の研究活動や科研費を継続するために発令されている。
- ・ 組織としては、コロンビア大学に加えて多数の機関と連携している。新規研究案件立ち上げる際、外部の研究者に主査や研究協力者を依頼しており、相当数の大学や他の研究機関と連携している。
- ・ JICA は現場があり、科研費に新規研究を提案、申請する余地が大いにある。当研究所で科研費を申請する過程で外部の研究者との連携を必然的に検討することが多く、外部との連携を考えるよい機会と認識。
- ・ 成果物の見せ方について、ご指摘を踏まえ改善したい。
- ・ 平和領域は海外の研究機関と緊密に連携し時間をかけて書籍を発刊するが、

成果としては書籍 1 カウントのみとなる点、その国際的意義も国内で理解を得るのが難しい点に課題を感じており、いただいたコメントに示唆を得た。

(人間の安全保障)

- ・ 人間の安全保障レポート第 4 号は政策コミュニティとも対話して特集テーマを考えていきたい。

(発信)

- ・ 研究所のウェブサイトは JICA 全体のフォーマットで統一されているという制約はあるものの、できる限り SNS の活用含めて発信を強化していきたい。
- ・ 地政学上の重要な動きへの対応について、7 月 23 日に開催したウェビナー「揺らぐ開発協力―地図なき時代に描く ODA」に多くの参加者を得て、タイムリーな発信や議論の場の構築が重要であることを再認識したところ。このようなシンクタンク的な即時性のある発信活動への取り組みも今後の検討課題。

以 上